博士学位申請論文

時間的近接関係を表す複合辞の研究

立教大学大学院　文学研究科

ハディウトモ　ドゥイ　アンゴロ

目　次

第一章　研究の目的と方法. . . . . 一

一　研究の背景. . . . . 一

二　研究の目的. . . . . 二

三　先行研究. . . . . 四

四　研究の方法. . . . . 八

第二章　「とたん（に）」. . . . . 一一

第一節　はじめに. . . . . 一一

第二節　先行研究. . . . . 一二

第三節　辞書記述. . . . . 一四

第四節　新聞の用例. . . . . 一九

四．一「Ｖた」＋「とたん(に)」. . . . . 二〇

四．二「その」＋「とたん(に)」. . . . . 二三

四．三「とたんに」. . . . . 二七

第五節　江戸語における「とたん(に)」. . . . . 三二

第六節　近代語における「とたん(に)」. . . . . 三五

六．一　明治期. . . . . 三五

六．一．一　「Ｖる」＋「とたん（に）」. . . . . 三六

六．一．二　「Ｖた」＋「とたん(に)」. . . . . 四一

六．一．三　「その／この」＋「とたん(に)」. . . . . 四四

六．一．四　「とたん(に)」. . . . . 四五

六．二　大正期．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．四八
六．二．一　「Ｖる」＋「とたん(に)」．．．．．．．．．．．．．．．．．．四八
六．二．二　「Ｖた」＋「とたん(に)」．．．．．．．．．．．．．．．．．．五一
六．二．三　「その」＋「とたん(に)」．．．．．．．．．．．．．．．．．．五四
六．二．四　「とたん(に)」．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．五八
第七節　おわりに．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．六〇
第三章　「瞬間（に）」．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．六二
第一節　はじめに．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．六二
第二節　先行研究．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．六三
第三節　「瞬間」の辞書記述．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．六七
第四節　現代語における「瞬間（に）」．．．．．．．．．．．．．．．．．．七一
四．一　「Ｖた」＋「瞬間（に）」．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．七一
四．二　「Ｖる」＋「瞬間（に）」．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．七六
四．三　「その瞬間」．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．七八
第五節　江戸期における「瞬間（に）」．．．．．．．．．．．．．．．．．．八一
第六節　近代語における用法．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．八三
六．一　明治期．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．八三
六．一．一　「瞬間（に）」．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．八三
六．一．二　「刹那（に）」．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．八八
六．二　大正期．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．九三
六．二．一　大正期の「瞬間（に）」．．．．．．．．．．．．．．．．．．．九三
六．二．二　大正期の「刹那（に）」．．．．．．．．．．．．．．．．．．．一〇〇
第七節　おわりに．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．一〇三

第四章　「はずみ（に／で）」. . . . . 一〇六
第一節　はじめに. . . . . 一〇六
第二節　先行研究. . . . . 一〇七
第三節　辞書記述. . . . . 一〇八
第四節　現代語での用法. . . . . 一一一
第五節　江戸期における「はずみ（に／で）」. . . . . 一一九
第六節　近代語における用語. . . . . 一二四
六．一　明治期における「はずみ（に／で）」. . . . . 一二四
六．二　大正期における「はずみ（に／で）」. . . . . 一二七
第七節　おわりに. . . . . 一三一
第五章　「拍子に」. . . . . 一三三
第一節　はじめに. . . . . 一三三
第二節　先行研究. . . . . 一三四
第三節　辞書記述. . . . . 一三六
第四節　現代語における「拍子に」. . . . . 一三九
第五節　江戸期における「拍子に」. . . . . 一四一
第六節　近代語における「拍子に」. . . . . 一四八
六．一　明治期. . . . . 一四八
六．二　大正期. . . . . 一五七
第七節　おわりに. . . . . 一六五
第六章　「矢先（に）」. . . . . 一六七
第一節　はじめに. . . . . 一六七
第二節　先行研究. . . . . 一六八

第三節　辞書記述. . . . . 一七一
第四節　現代語における「矢先（に）」. . . . . 一七四
第五節　江戸期における「矢先（に）」. . . . . 一九三
第六節　近代語における「矢先（に）」. . . . . 一九五
六．一　明治期. . . . . 一九五
六．二　大正期. . . . . 二〇六
第七節　おわりに. . . . . 二一二
おわりに. . . . . 二一四
参考文献. . . . . 二一七

要　約

本論文では、ある事象が成立した直後に、別の事象が成立するという意味を表す表現を主として取り上げて、時間的に近接関係を表す複合辞のうち、名詞に由来する「とたん（に）」「瞬間（に）」「はずみ（に／で）」「拍子（に）」「矢先（に）」の意味・用法について考察する。さらに、現代語の意味・用法をよりわかりやすく説明するために、江戸時代、特に江戸語から東京語にかけての近代語を中心として、その接続の形式および意味の変化についても併せて分析することにした。

第一章では、研究の目的や方法、先行研究などについてまとめた。まず、時間的近接関係を表す複合辞は、現代語において、「た」という過去形（以下、「Ｖた」形と呼ぶ）に接して「…たとたんに」「…たはずみに」などのように用いられるという共通点があることを踏まえて、前件と後件との事態の相対的な成立は「以前」「同時」「以後」という三つに区分に設定される中で、それぞれの意味用法の解明を行う方針をとることにした。次に、現代語に関する先行研究を紹介した上で、現代語の意味用法の背景となる歴史的研究がまだ見当たらないことから、現代語に至る意味用法の変遷を解明することにも力点を置くこととした。調査資料としては、現代語としての意味用法は主に『朝日新聞』の用例に基づいて分析することにし、江戸時代、およびそれ以前の資料としては、日本古典文学大系（岩波書店刊）、および国文学研究資料館によってデータベース化されている、江戸時代に成立した作品を用いた。特に、江戸語の資料を重視したが、必要に応じて上方語の資料も検討した。明治期・大正期の資料としては、CDROM 版『明治の文豪』『大正の文豪』、および国立国語研究所によってデータベース化された『太陽』、また数種の「近代女性雑誌」などを検索して、用例を収集することとした。できるだけ細かく接続や文構造上の違いによって分類して意味・用法について検討することとし、まず現代語の意味用法を分析し、続いて、近代語の意味・用法を調査分析して現代語への変遷を記述するようにした。

第二章では「とたん（に）」を扱う。複合辞としての用法は江戸時代に成立し、現在形「Ｖる」に続く形式となっている。前件の事態の成立した直後に後件の事態が成立する意を表し、後件には「予期しない」という事態を提示する。「Ｖた」形に続く形式は明治期、調査した範囲では一九〇一年の雑誌『太陽』に確認できた。この両者では、「Ｖる」形に続く形式は出来事の同時性のニュアンスが、「Ｖた」形に続く形式は直後性、継起性のニュアンスが強いように考えられる。また、明治期には「とする」「うとした」という形も見えるとともに、打消の「ない」に続く用法もあった。大正期には、「そのとたん（に）」がさまざまな連用修飾節に続く例も確認できた。その後、現代に至って、「Ｖた」＋「とたん（に）」という形式だけに限られるようになった。他方、「とたん」につく助詞「に」の有無は、文全体の意味には影響されないが、助詞のない「とたん」のほうが緊迫感のニ

ュアンスを帯びると見られる。

第三章では「瞬間（に）」を扱う。「瞬間」はもともと「またたくひまに」などの漢字表記として用いられたものであって、その字音読みによって江戸時代、早くても江戸時代末期ごろに成立したと見られる。そして、明治期に入って複合辞の用法が成立し、これに前接する形態には「Ｖる」形と「Ｖた」形とが見える。前者は同時性、後者は直後性、継起性のニュアンスを伴って用いられていたと考えられる。明治期では「Ｖる」形と「Ｖた」形に続く用例数がほぼ等しいのに対して、大正期になると「Ｖた」形のほうが多用されるようになり、現代語ではほとんどが「Ｖた」形となる。明治期から現代まで、前件に「Ｖる」形と「Ｖた」形の両形があり、前者は動きが未完了であるのに対して、後者は動きが完了した局面を指していると考えられる。助詞「に」を伴わない形式は、「に」を伴う形式よりも、緊迫感のニュアンスを伴っている。

ちなみに、明治期と大正期には「瞬間」と同じ意味用法を持つ「刹那」が複合辞としても多く用いられていたが、現代語ではほとんど見当たらない。明治期・大正期における、「刹那」の前に接する形式に「Ｖる」形と「Ｖた」形とがあるが、大正期になると、「Ｖる」形に接続する「刹那」の用法に複合辞的な用法が少なくなる。

第四章では「はずみ（に／で）」を扱う。江戸時代には複合辞「はずみに」が用いられ、「はずみで」は一九一二年の用例が確認できた。他方、助詞「に」のない「Ｖるはずみ」もすでに江戸時代に見えた。前件との接続形式では、江戸時代では「Ｖる」形も「Ｖた」形もあり、大正期までは「Ｖる」形に続く用例のほうが多く、「Ｖる」形「Ｖた」形いずれも完了のアスペクトを表したが、現代語では「Ｖた」形だけに続くようになる。江戸時代では前件・後件ともに、好ましくないというマイナスイメージの出来事だけでなく、中立的な出来事が述べられることも多く、また、因果関係のニュアンスもあまり強くなかった。これらの傾向は大正期まで続く。江戸時代では「Ｖた＋はずみに」は前件と後件の主語が異なり、「Ｖる＋はずみに」はそれが同じであったが、明治期になると、「Ｖる＋はずみに」の前件と後件の主語が異なる場合も見られるようになる。明治期には「うとするはずみに」の形も用いられた。ちなみに、副詞用法の「はずみで」が一九一七年に確認できた。

第五章では「拍子（に）」を扱う。「拍子」の複合辞としての用法は一四七七年にさかのぼることができ、今回扱った複合辞の中では最も古い。「拍子に」への接続形式は、江戸時代「Ｖる」形しかなく、なかには、前件の動きが未完了である事態を受ける「うとする」形も見えた。「Ｖた」形に続く形式は、調査した範囲では一九〇〇年（『高野聖』）の用例が最も早いものであった。明治以降、「と」「が」などの接続詞に続く「その拍子に」が、複数の動きを前件とする用法として用いられており、一方、「拍子に」は物事の関連性を表すことに重点があって、契機性のニュアンスが強い。ちなみに、明治期には、副詞用法の「拍子で」が見えた。

第六章では「矢先（に）」を扱う。時間的近接関係を表す複合辞「～矢先（に）」は江戸時代に見え、「Ｖる」形に付いて、前件の事態の成立した直後に後件の事態が成立する意を表した。明治期になると、「Ｖる」形に続く形式は直後の意を表すとともに、前件の事態の成立する直前に後件の事態が成立する意でも用いられるようになる。明治期には「うとする」「うという」に続く形が多く見え、実質的には〈前件の事態の成立する直前に〉という意で用いられている。「矢先に」が「Ｖた」形に続くのは一九〇八年（『坑夫』）が調査した範囲では最も早いものであった。明治期には口頭語的、俗語的な「矢先へ」の使用も見られ、大正期には、「ている」に続く「矢先に」が直後性を表す例も見えるようになった。

総じて、複合辞という形態は単純語としての助詞・助動詞の用法を補うものとして、近代語において発達したものであり、現代日本語の特徴の一つである。歴史的に見ると、複合辞は室町時代末期には既に存在しており、江戸時代に入ってさらに発達していった。時間的近接関係を表す複合辞では、江戸時代に「瞬間」以外の「とたん」「はずみ」「拍子」「矢先」の語が成立しており、「拍子に」は一五世紀にまで遡ることができる。その接続の形式は「Ｖる」形（現在形）であったが、「はずみに」だけはいち早く「Ｖた」形（過去形）が用いられていた。明治期に入ると、「はずみに」以外にも、「Ｖた」形に続く形式が用いられるようになり、「とたん（に）」「はずみ（に／で）」「拍子（に）」「矢先（に）」に加えて、「瞬間（に）」も「Ｖる」形・「Ｖた」形いずれにも付く形で用いられた。その後、「とたん（に）」「はずみ（に／で）」「拍子（に）」では「Ｖる」形接続は衰退し、現代では「Ｖた」形接続だけが用いられることになった。一方、「矢先に」は新たに「Ｖた」形に接するようになり、「Ｖた」形か「Ｖる」形かの接続の違いによって、直後／直前という意味の違いを持つというように、用法を明確化する方向で発達してきた。このように「Ｖた」形に付く方向で変化してきたのは、前件が過去の、もしくは完了した事柄として表現されることで、その直後性、継起性の意味がより明瞭になるからであり、表現を合理化していくという傾向によるものであると言うことができよう